

原田種成著「私の漢文講義」大修館書店 1995年10月1日刊を読む

## 論語の解釈

1. (1)①『論語』の解釈は漢代以来、我が国のそれも含めて実に無数にあり、さまざまな解釈がなされている。
    - ②だから、時折り「この本とこの本とでは解釈が違っているがなぜでしょう」とか、「どの解釈が正しいのでしょうか」という質問を受けることがある。
  - (2)①私は『論語』のような古典は、さまざまな解釈がなされるものだと思っている。
    - ②それは今から八百年ほど前の朱子が著した『論語集註』も我が江戸時代の伊藤仁斎の『論語古義』、萩生徂徠の『論語徴』も、みなそれぞれに、その時代、その社会に基づき、また自己の思想から、孔子の真意、孔子の精神を追究し、われこそ真に孔子を理解したものであるとして、注釈を施したのである。
    - ③だから、時代により、人により、さまざまな解釈がなされるのである。
    - ④現代はまた現代人として真の孔子を把握しよう、孔子の精神に迫ろうとしているのである。
    - ⑤中には、もし孔子がその解釈を知ったならば、自分はそのまでは考えていなかったよ、と言うかもしれない。
    - ⑥しかし、それでよいのである
    - ⑦それが古典というものである。
2. 開卷第一章を解釈してみよう。

子曰、学而時習<sup>し</sup>之、不<sup>レ</sup>亦説<sup>レ</sup>乎。有<sup>下</sup>朋自<sup>二</sup>遠方<sup>一</sup>来<sup>上</sup>、不<sup>レ</sup>亦樂<sup>レ</sup>乎、人<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知而不<sup>レ</sup>愠、不<sup>レ</sup>亦君子<sup>一</sup>乎。(子曰く、学びて時に之を習う、亦説ばしからずや。朋の遠方自り来たる有り、亦楽しからずや。人知らずして 搢<sup>いぎどお</sup>らず、亦君子ならずや)

- (1)①「子」は男子の美称と解され、敬語である。
  - ②それが、先生に対する敬語にも使われるようになった。
  - ③今の学校とは異なり、孔子のところでは先生は孔子一人だけであるから、ただ「子」といえば孔子であった。
  - ④「曰」は口を開いて言うことである。昔ある講習会で『論語』を講義したとき、なぜ日(ひ)の字を「いわく」と読むのですかと質問された。
  - ⑤「日」は太陽の象形字であり、細長く書き、「曰」は口を開いて声を出している形で、左肩の部分を着けずに少しあけて書くのが正しく、横長に書き、両者は全く別の字である。
  - ⑥「子曰」とは、孔子の言葉を門人が記録したからで、「先生がおっしゃった」という意味である。
  - ⑦昔は「子曰」を「子のたまわく」と読んでいた。

⑧それは孔子を尊んで丁寧にいった言い方である。

⑨しかし、明治四十五年三月の官報に載った漢文の読法には、敬語は我が皇室に関する場合の外は用いない、と書いてあるから、「のたまわく」と読まず、「いわく」でよろしい。

(2)①次に少し先に行くが、ここに「説」と「楽」とがある。

②孔子というと何か道徳のかたまりで、四角四面な人と思いがちであるが、孔子はそんな人ではない。

③人生に悦びと楽しみとは欠くことのできないものであり、それなくしては生きて甲斐がないと思っていたのだと思う。決して悦楽を否定するものではないが、悦や楽の中には金がかかるものや不健全なものもある。

④この章は人の気づかない悦と楽とを語ったものと思う。

(3)①「説」を「悦」と同じく「よろこぶ」と訓むのは、古代は文字の数が少なく、「説」の字は「セツ」と読む「説明」の意と、「エツ」と読む「喜ぶ」意との両様に使われていたからである。

②後世、喜ぶ意には「悦」の字が作られた。

3. (1)①「学而時習之、不亦説乎」を「学問勉強して、それをいつも復習することは喜ばしいことだ」と解するのがあるが、いったい、学問に喜びを感じずる人は、この世の中に何人いるだろうか。

②とても普通人のできることはない。

(2)①「まなぶ」という語源は「まねぶ」、つまり、まねをすることである。

②趣味でもスポーツでも、習い初めは上手な人のまねをすることである。例えば水泳でも、手はこう、足はこうと教わり学んでも、すぐには泳ぐことができない。

③それを、繰り返し練習しているうちに、今までできなかったことができるようになる。その喜びは心の底からこみあげて来るもので、金銭では買うことができない。

③だから「不亦説乎」、なんと喜ばしいことではあるまいかと言っているのである。

(3)①何事でも、ただ教わり学んだだけではうまくできない、

②繰り返し練習することによって自分のものとなる、その喜びを指摘してくれたものと思う。

③「時」は、機会あるごとにと解し、常にと解しているがどちらでもよい。

4. (1)「有朋自遠来」を「朋有り…」と読むのがあるが賛成できない。古代の辞書の『説文解字』に「有、不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>有也」(有とは有るべからざるなり)と解しており、めったにないことがあった意である。

(2)①遠く離れて何年も会わない友達が珍らしく訪ねて来た。

②何と楽しいことではあるまいか。

③人生の楽しみは良き友を持つことである。

(3)①社会人になってから、学校時代の友達と会うことは本当に楽しい。

②同級会や同窓会には、つとめて出席するように心がけたいものである。

5. (1)「人不知而不愠、不亦君子乎」の「愠」は心の中でムツとすることである。

(2)「怒」が顔や態度に表れる怒りであるのとは違う。

(3)「君子」は『論語』の中で二種類の意味に使われている。①は教養あり人格のすぐれた人。  
②は地位・身分の高い人。ここは①の意味である。

6. (1)学んで習うことに喜びを持ち、めったに会わない友と会うことを楽しみとし、世のため人のためになるように働き、例えば職人さんならば使う人の身になって手抜きの物は作らず、商人ならばごまかしをせず、曲がったことは少しもしないで正しく生きている。

(2)①しかし、それを人は認め知ってくれない、いやそんな正直な人はかえってボロ儲けをすることはできずして経済的には恵まれないことが多い。

②それでも腹を立てない。

③なんと立派な君子ではあるまいか。

(3)①「君子」は『英訳論語』ではゼントマンと訳している。

②英国のゼントマンは家柄が良く名門の大学を出なければならない。

③しかし、この君子はそんなものではなく、学歴もないただの市民の中に、このような君子がいる。

④われわれの周囲にも注意すればここにいう君子がいるはずである。

7. (1)孔子は少しもむずかしいこと、実行しにくいことを言っているのではない。

(2)この章こそ『論語』の開巻第一章にふさわしい章である。

P144 ~ 148

### <コメント>

名著、明治書院刊の新釈漢文大系「貞観政要(上)(下)」の著者、原田種成先生の漢文の入門書「私の漢文講義」に所収の「論語の解釈」。孔子の教えを弟子たちが499章にまとめた第一章「学而(がくじ)」の原田先生の解釈は、とても参考になります。是非一度「論語」を手に取り、499章をじっくりお読みください。